

グロテスクな愛の射程

——坂口安吾「紫大納言」論——

若松 伸哉

ちやうど四年前ですが、私は、やつぱり、美しい物語を書かうとして「吹雪物語」を書きました。私はただ、人の心をゆたかにし、人の心を高めるところの、たのしい、幸福な物語を書き残さうと、一途に考へて、書いたのです。

思ひもよらぬ結果でした。美しいのは、題だけでした。書き終つた物語は、ただ陰惨で、まつくらで、救ひがなく、作者は呆然とし、絶望しました。「吹雪物語」を読む人は、ただ、悔恨と、咒詛と、疑惑と、絶望と、毒を読みとるにすぎないでせう。

[…]

このやうにして、私は、自分の意図とはうらはらな自作の暗さに絶望し、やりきれなくなるたびに、筆をやめ、さうして、直接人性と聯絡しない架空の物語を書きはじめます。それは、気楽で、私をたしかにホッとさせます。書いてゐて、充実したものはなくとも、たしかに、気楽で、たのしかつた。

坂口安吾は一九四一（昭和一六）年四月、スタイル社より刊行された自身の創作集『炉辺夜話集』の「後記」において右のように記している。ここで安吾自ら過剰なまでに否定的に言及している『吹雪物語』は、一九三八年七月に書き下ろし長編小説として竹村書房から刊行されており、引用文の出典である『炉辺夜話集』には、『吹雪物語』の

後、一九三八年から一九四〇年にかけて発表された「閑山」「紫大納言」「勉強記」「イノチガケ」「盗まれた手紙の話」の五作品が収録されている^①。そして、『吹雪物語』と『炉辺夜話集』のあいだには「絶望」から「気楽」へと作者の心境に大きな違いがあったことを引用文は示している。

よく知られているように、一九三六年一月から書き進められた『吹雪物語』は、翌一九三七年には一時執筆不能な状態に陥っている。このあたりの安吾の苦悩についてはほぼ同時期のエッセイ「困碁修業」(『都新聞』一九三八・六・二一〜二三)にうかがうことができるが、戦後になって『吹雪物語』が再び刊行されるにあたり、安吾は次のように書いている。

そして無為に臍をかむ一カ年、私は遂に意を決した。

私は間違つてゐたのではない。私は始めの目的通り、私の過去に一つの墓をつくつたのだ。インチキなるものが、インチキなる墓をつくつただけではないか。私はそう諦めることによつて、ともかく、生きる力を得た。私は諦めることによつて絶望をやめ、そして、再生に向かつたのだ。インチキ自体をもつて墓標をかたどることによつて、私は裁かれ、いくらかでもインチキでないやうに、出発しなければならぬのだと信じたのだ。信じようとしたのである^②。

『吹雪物語』出版という「墓標」によつて「再生」に向かうストーリーが安吾自身によつてこのように語られたこともあり、『吹雪物語』は彼の作品史のうえで一つの転機として捉えられ、その後に書かれた「閑山」「紫大納言」などは彼の「再生」の実践作としてこれまで言及されてきた^③。

さて本稿では、問題作『吹雪物語』の後に発表された作品のなかでも特に「紫大納言」に焦点を当てたい。「紫大納言」は三好達治が中心となった文芸雑誌『文体』に、一九三九年二月に発表されており、先に述べたとおり『吹雪物語』後の安吾の新たな道行きを示す作品であり、また、「むごたらしいこと、救ひがないといふこと、それだけが、唯一の救ひなのであります。モラルがないといふことと自分がモラルであると同じやうに、救ひがないといふこと

自体が救ひであります。／私は文学のふるさと、或ひは人間のふるさとを、こゝに見ます。文学はこゝから始まる——私は、さうも思ひます」と述べる安吾の著名な評論「文学のふるさと」（『現代文学』一九四一・八）の色濃い反映が指摘される作品でもある⁽⁴⁾。本稿で試みたいのは、坂口安吾の作家論的な水準においてすでに研究の蓄積がある本作品について、同時代的な広がり⁽⁵⁾のなかでどのような意義を見出せるかということであり、そこに「紫大納言」の新たな魅力を提示できればと思う。

—

坂口安吾研究において『吹雪物語』での〈挫折と再生〉と関連をもって語られる「紫大納言」だが、ちょうど同じ時期、もう一人〈再生〉を果たした著名な作家がいる。それは精神病院への入院、その間の妻の不義、そして心中未遂など生活上の破綻から立ち直り、一九三八年後半から旺盛な作品執筆を再開した太宰治である。この時期の太宰治の〈再生〉を象徴する作品の一つとして「富嶽百景」が挙げられるが、「富嶽百景」は「紫大納言」と同じく、雑誌『文体』の一九三九年二月から翌月にかけて掲載されている。坂口安吾と太宰治がほぼ同時期に〈再生〉を果たし、同雑誌の同号に小説を寄せるという興味深い事実も見られるのである。

太宰の「富嶽百景」は、作者自身を主人公として、山梨での新しい婚約の成立までを描いた自伝的な〈再生〉の物語となっており、新たに変化していこうとする主人公「私」の姿が印象付けられているが、以前拙稿で論じたように、そこには一九三七年七月の日中戦争の開始とともにわき起こった、日本国内の新たな変化を求める動向との親和が見て取れる⁽⁶⁾。安吾の「紫大納言」は直接〈再生〉をテーマにしたものではないが、同時代のこうしたモードと全く無関係だったのだろうか。

昔、花山院の御時、紫の大納言といふ人があつた。贅肉がたまたま人の姿をかりたやうに、よくふとつてゐ

た。すでに五十の齡であつたが、音にきこえた色好みには衰へもなく、夜毎にをちこちの女に通つた。

「紫大納言」の書き出しは右の文章となつており、舞台が花山院のころの平安朝、そして主人公の「紫の大納言」が「音にきこえた色好み」であることが提示されている。五〇歳を過ぎても複数の女性のもとへ通う大納言だが、ある晩、偶然拾つた小笛の縁によつて出会つた天女に生涯はじめの愛をおぼえるものの、その愛は拒絶され最後には身の破滅へと至つていくのが一篇の大まかなストーリーとなつてゐる。

この〈愛〉ということに注目して同時代を見渡したとき、当時のベストセラーであつた石川達三の『結婚の生態』（一九三八・一一、新潮社）が視野に入ってくる。『結婚の生態』は第一章において、結婚に対して「永いあひだ否定的な考へをもつてゐた」主人公「私」のなかで、次のような心情の変化があつたことが記されている。

このとき私の心に於ける重大な変化は、良い生活とはすなはち良き結婚生活を意味するやうになつてゐたことである。二十四五歳のころから以後ずつと続いてゐた結婚否定の皮相な考へが崩壊したあとには、不思議にも青春時代にもつてゐたやうな良き結婚への夢に似た憧憬が甦つて来たのであつた。

結婚の否定から肯定への心情変化が小説のはじめに描かれ、「自序」に「自分を美化することなく、欠陥を掩ひかくすことなしに、或る大切な生涯の一時期を最も正確に記録しておきたいと思ふ」とあるように、その結婚生活を記録していく。そして『結婚の生態』が当時よく読まれたことは次の亀井勝一郎の言によつてもわかる。

「結婚の生態」は昭和十三年の作である。石川氏の流行作家としての地位は、これによつて確立されたと言つていゝ。この作品と前後して、石坂洋次郎の「若い人」、島木健作の「生活の探求」があらはれたが、この三つの小説が当時におけるベストセラーであつた。非常に読まれるといふことは、むろん流行性もあつて恣意的なものだが、また或る時代の青年の関心をひく問題を含んでゐることもたしかである。⁽⁷⁾

そしてこのベストセラーについて、実は安吾が反応している。彼は次のような評を書き残している。

石川達三氏の『結婚の生態』は石川氏が愛情なく同棲した女と別れ、健全な結婚を目標にしてその生涯の建設

を企て、から、つひに女を探し得て結婚生活に入り、子供をもうける二年間ほどの記録である。

この記録に語られてゐる石川氏の生活は、すべてその人生観が土台であり、結婚生活がそれに沿うて著々築かれて行くのであるが、人生観と生活が一読羨望に堪へないぐらゐる食ひ違ひがなく破綻をみせない。この作品の強味もこゝにあり、また最大の弱点もこゝにあるのだと僕は思ふ。

安吾は「健全な結婚」「生涯の建設」といった主人公の目標を述べながら、「人生観と生活」がまったくの齟齬なく「破綻」しない点に、『結婚の生感』の「強味」を認めつつも同時に「最大の弱点」をも見ている。つまり〈健全な愛〉を謳う同時代のベストセラーに違和を唱える安吾の感性がここに見て取れるのである。以上をpushしたうえで、世間で〈革新〉が叫ばれたこの時期に同書がベストセラーとなる文脈・背景を次に確認しておきたい。

二

日中戦争がはじまった一九三七年七月以降、日本国内では新たな体制を求める〈革新〉の語が雑誌メディアでは氾濫するが、文壇においては一九三八年に入ってから文学における〈革新〉を訴える文言が目につく。大きな総合雑誌を見ただけでもそのようなニュアンスを持った文章がいくつも掲載されている。たとえば林房雄「文学と国策」(『改造』一九三八・六)は次のように言う。

情弱なる三代目文学をして自滅せしめよ。今こそ日本文学の革新期である。光榮ある明治の精神は現代文学者の健康なる部分によつて継承されなければならぬ。

日本国民は美と健康に溢れた日本文学の出現を待ち望んでゐる。

現在が「日本文学の革新期」という認識のもと、「美と健康」を持つ文学の出現を林房雄は訴えている。そして、この林の文章が掲載された翌月の『改造』には、よく似た発想の武田麟太郎の文章が掲載されている。

我々はきのふまでの暗澹とした世界から脱却して、明快に動かうとしてゐるのだ。事実に対する観念的な否定や無関心が何の役にも立たないのを悟りはじめた。絶望をしのぐ生存欲に駆り立てられ、生きる、生きてゐると云ふ大きな人生的テーマと組打ちしてゐる、その純粹な絶対面にまで自分を押しつけてゐる。

頽廢や虚無の低迷にあまえていい気持になつてゐる時ではないのを知つてゐる。能動的で創造的な強さを求めてやまないのだ。

じけじけといぢけ、陰鬱な表情を持ち越して何かありさうにする敗北主義とも絶縁した。押しひしがれて了ふ無氣力を嫌つて、健全であらうとする意志欲望を誇示しようときへしてゐる。⁹⁾

引用文の最後には「健全」へと向かう強い意志がはつきりと示されていることや、「きのふまでの暗澹とした世界から脱却して、明快に動かうとしてゐる」の部分からわかるように、現在を〈革新〉のときだと捉えている点においても、武田麟太郎の文章と先引した林房雄の文章はよく似ている。また、やはり同時期に『中央公論』に載つた片岡良一の文章にも同様の発想が認められる。

高見順氏の『人間』（文芸春秋九月）とか火野葦平氏の『麦と兵隊』（改造八月）とか、其類の作品は、『冬の宿』に残された健康さを、更に積極的になぎらせたやうな趣を持つてゐる。〔…〕

現代は建設の時代だといふ。昨日までの混沌と絶望的な頽廢とを乗越えて、人間再建が意図されはじめた時代だといふ。そのためによりよき諦観が氣運してゐることも附け加へたい。¹⁰⁾

片岡もまた「建設の時代」における「健康」を訴えており、林・武田らの文章と類似している。『改造』『中央公論』という当時の二大総合雑誌に掲載された三者の文章はもちろん全くの偶然の一致というわけではないだろう。日中戦争の開始とともに戦時下となった現在を革新期と考え、文学のなかに健全性／健康性を求めていく思考が文壇のなかに瀰漫していたことをこれらの文章は想像させる。ではもう少しこうした文壇の動きに注目してみたい。

一九三八年一〇月に掲載された窪川鶴次郎の次の文芸時評は、当時の時局が文学作品に与えた影響の一面を伝えて

いる。妻との心中未遂を描いた太宰治「姥捨」〔新潮〕一九三八・一〇）などに触れて、「確に今日の時局下の生活に対しては水と油のやうなものだ。然し私は、かういふ作品を不健康だと言つて頭つから排斥するのには賛成できない」と述べた上で、窪川は以下のように続ける。

これらの作品がいかに今日の時局に対して水と油のやうなものであらうとそれは今日の生活に対して最も直接的な意味を持つてゐる。それは少くとも今日の時代に対して最も自然である。現在、何と不自然な作品の多いことだらう。⁽¹¹⁾〔傍点原文〕

窪川は時局との関係から「不健康」を排斥する風潮に異議を唱え、現在の「不自然」な作品の横行を否定的に語っている。ここからも先に見た文壇における〈健康性〉の声の影響力がわかる。そして同じ一九三八年一〇月に発表されている川端康成の文芸時評でもやはり〈健康性〉は話題になっており、「一体に、「転向作家」には健康がある」と言う川端は、その代表として森山啓の名前を挙げてゐる。⁽¹²⁾

プロレタリア文学に属する森山啓だが、このころは川端が先の文芸時評で「いかにも人柄の美しさが感じられる清潔な文章」と、その作品を評するほか、古谷綱武も次のように森山を評している。

単純ではあるが、人間に対する純一な愛情のために、ひとのこゝろに触れてくる作品は外にもある。

たとへば、森山啓だ。彼は、みづからも愛情派と称してゐるが、さういふ点で、彼の小説の仕事は認められてよいと思ふ。森山啓の特質は、殆ど運命的とさへいつてよいほどのものを悪意的に見られないことだ。⁽¹³⁾

森山作品が持つ「愛情」を古谷は述べているが、川端の言にも明らかのように、こうした森山作品は先ほど確認してきた同時代の〈健康性〉のモードとつながっている。その関連については森山自身も自ら述べている。

現代文学の他の特徴の一つは、愛欲のテーマに現はれてゐる。

元来、愛欲に悩まぬ人間は一人もゐないのだから、文学者がそれを扱はないとすれば寧ろその人の欠陥でさへある。大文学と呼ばれるほどのものでそれを扱つてゐない作品は一つもない。併しそれをどのやうに扱ふかが問

題なのである。⁽¹⁴⁾

すでに一九三七年七月に「愛欲」を描くことを文学のテーマとして主張していた森山は翌一九三八年一月に発表された「文学上の「健康性」」のなかで、「文学も健康なものであることが望ましく、また今日特に健康な文学が必要である」と切り出し、文学における〈健康性〉の必要を訴えたうえで、「文学に必要なのは、愛慾の曝露ではなくて真の愛情である」と述べている。⁽¹⁵⁾

日中戦争開始後の文学において〈健康性〉が求められたこと、そしてその一つとして〈愛〉というテーマがあったことをこれらの言説は示している。こうした同時代の文脈上に前節で触れた石川達三『結婚の生態』のベストセラー現象があったのである。⁽¹⁶⁾先に述べたように安吾の「紫大納言」の基盤となっているのは大納言の〈愛〉の物語であり、主人公の婚約成立をメインストーリーとしながら、周囲との愛情を確認していく太宰の「富嶽百景」もまた〈愛〉の物語である。一九三九年二月、同じ雑誌『文体』に掲載された両者は、舞台や設定は違えどもこの点でゆるやかな共通項を持っている。

そして、このとき「健康」的な「愛情」を描く森山啓と坂口安吾はわずかながら接点があったのである。森山が安吾「吹雪物語」について一九三八年九月に発表した評を次に掲げる。

坂口安吾氏の「吹雪物語」についてだけ、一言でいふのは悪いかも知れないが、先づ長い年月を費して存分に書いたといふことに尊敬がもてるし、そのやうにして仕上げた作品を新人の「書きおろし長篇」として出版することにも賛成である。

筆力たくましく、個性のある長篇だが、その夢と知性は、少しく古い観念世界での宿酔の気味を感じさせ、敢て健康とは申せず、又思弁の雲のなかに人像は薄れてゐないだらうか。⁽¹⁷⁾

引用文を見て明らかのように、森山は「吹雪物語」の「健康」ではない点を批判する。同時代文壇の一つのモードであった〈健康性〉の観点から森山に安吾作品が裁断される興味深い評だが、「吹雪物語」に対するこのような批判

はある程度共通する見方だったようである。安吾の友人でもある大井広介が樽尾好の筆名で書いた一九三八年一二月の文芸時評にも文学における「建設性、生産性、積極性」の必要性が説かれているが、同文章には「しかも、「吹雪物語」は相当異常であり、私は『悪酔』『健康を志して異常』と『槐』に書き、其後森山啓も『宿酔』『不健康』と批評した位、衆目一致するものがあつた」と記されており、⁽¹⁸⁾「吹雪物語」の健康ではない異常さが共通認識であつたとがわかる。ここでは特に「吹雪物語」についてであるが、同時代に求められた〈健康性〉の観点から裁断される安吾作品の姿が確認できるのである。

三

すでに触れたように、安吾『紫大納言』は大納言と天女との愛と拒絶の物語がメインストーリーとなっている。かつて奥野健男はこうした展開を捉えて、本作品を「まことに芸術至上主義の結晶とも言うべき、かなしく美しく切ない恋の物語」と評した⁽¹⁹⁾。しかしその一方で、これも先述したように「紫大納言」は「むごたらしいこと、救ひがないといふこと、それだけが、唯一の救ひ」と謳う安吾の評論「文学のふるさと」の実践作として論じられる作品であり、むごたらしさや救いの無さを持つ小説でもある。その要因の一つとして、天女に自分の思いを拒絶され、悲惨な末路をたどる大納言の姿が印象深く描かれている点が挙げられる。嶋田彩司が「大納言の周囲には、彼の思いの届かない他者でみちあふれていたのである。大納言はこのとき、まったく孤独でぶざまな一個の人間でしかなかった」と論じるように、⁽²⁰⁾ 思いの届かない他者の存在が作品のなかで強く提示されているのだが、さらに嶋田が同論のなかで「彼の切実な思いからでた言動でありながら、実のところ他者には与り知らぬ、身勝手な言い分でしかなかった」と指摘するように、大納言自身のふるまいのなかにそもそも問題があるのも確かである。

「音にきこえた色好み」である大納言がはじめて天女の姿をはつきりと見たときの場面は次のように語られている。

さて、灯火のもとで、はじめて、天女のありさま、かほ、かたちを見ることのできたとき、その目覚ましい美しさに、大納言は魂も消ゆる思ひがしたのであつた。いかなる仇敵であらうとも、この美しいひとの嘆きに沈むさまを見ては、心を動かさずにはゐられまいと思はれた。

伽羅も及ばぬ微妙な香気が、ほのぼのと部屋にこめて、夜空へ流れた。

ともすれば、うつとりと、あやしい思ひになりながら、それをさへぎる冷めたいのをのきに気がついて、大納言は自分の心を疑つた。今迄に、ついぞ覚えのない心であつた。胸をさす痛みやうな、つめたく、ちいさな、怖れであつた。

大納言は自分の心と戦つた。

召使ふ者にいひつけて、うちかけを求めさせ、それを天女にかけてやつたが、そのとき、彼は、うちかけの下に、天女をしかと抱きしめて、澄んだしあひの官能をたのしみたいと思つてゐた。いや、うちかけをかけてやるふりをして、羅の白衣すら、ぬがせたい思ひであつた。

この場面で大納言は天女に対して「ついぞ覚えのない心」(＝愛)をはじめて抱くことになる。引用文の傍線部分はその大納言の天女に対する愛を示す箇所である。しかし大納言の抱く気持ちはこれだけではない。波線部分が愛ではなく、大納言が天女の肉体に対して抱く欲望となっている。引用文では「あやしい思ひ」(＝肉欲)と「それをさへぎる冷めたいのをのき」(＝愛)とあるように、はっきりと両者が対比的に描かれている。「色好み」の大納言が天女と出会うことによつてはじめて真実の愛をおぼえた、というストーリーに回収されることなく、テクストは大納言の肉欲と愛の葛藤を記し続ける。

几帳の蔭に悲しみの天女をやすませて、大納言は縁へでた。静かな月の光を仰いだ。はじめて彼は、この世に悲しみといふもののあることを、沁々知つた思ひがした。

かうして、ただ、月光を仰ぐことが、説明しがたい悲しきと同じ思ひになることは、いつたい、どうしたわけ

だらう。天女の身につけた清らかな香氣が、たちまち月光の香氣となつて、彼の胎内をさしぬき、もし流れでる涙があれば、地上に落ちて珠玉とならうと彼は思つた。ともすれば、あやしい思ひにおちるのを、不思議な悲しさがながれ、泣きふしてしまひたい切なさに駆りたてられて、道を走つた。

やがて、大納言は、息がぎれ、ほりさけさうな苦痛のうちに、天女のししあひを思つてゐた。痺れるやうなあやしさが、再び彼のすべてをさらつた。官能は燃え、からだは狂気の焰であつた。彼は走つた。夢のうちに、森をくぐり、谷を越えた。京の住居へ辿りついて、くづれるやうに、うちふした。

天女への愛ゆえの「悲しみ」「切なさ」を大納言はここではじめて知ることになるのだが、やはり同時に肉欲がそれを遮るやうに大納言の体のなかに同等以上の強度でわき起こっている。翌朝になつても大納言の心には「恋と、不安と、たくらみと、野獣の血潮」が同居しており、次のやうな決意をする。

あの一とを地上にとどめるためには、掌中に、常に笛がなければならぬ。さうして、あのまつしろなししあひを得るためにも——さういふことも、思はれた。

あの、まつしろなししあひが、もはや、大納言のすべてであつた。どのやうに無残なふるまいを敢てしても、あのししあひをわがものとしなければならぬと彼は思つた。

天も、神も、皓月も、また悪鬼も、この怖ろしい無道を、よく見てゐるがいい。どのやうな報いも受けよう。

あの一とのししあひを得てのちならば、一瞬にして、命を召されることも怖れはしまい。悔いもしまい。命をかけての恋ならば、たとひ万死に価しても、なほ、一滴の涙、草の葉の露の涙、くさむらにすだく虫のはかないあはれみ、それをかけてくれるものが、何者か、あるやうな思ひがした。

この場面に注目すると、今までの肉欲と愛の葛藤が一元化されていることに気付く。天女を地上にとどめようとする彼女への愛はすぐに「ししあひを得るため」と変換され、「ししあひを得てのち」ならば死んでもいいという覚悟は、最後に「命をかけての恋」と言い換えられている。対照的な肉欲と純粹な愛のあいだで引き裂かれた大納言の心

は、ここで肉欲を孕んだグロテスクな愛へと統合され、大納言の行動を推進していく。

そして、出会った盗人の徒党に笛を差し出した大納言は天女に事情を説明するが、受け入れてもらえず、「大納言の官能は一時に燃え」、半ば暴力的に泣き伏す天女と契りを結ぶ。「無限の愛と悔いのみが、すべてであった」と語られるように、天女と契りを結んだ後の大納言は愛と後悔によって失った笛を探しに行き、盗人たちの暴力によって瀕死の状態となり、最後にはせせらぎの「一掬の水」となってしまう。「無限の愛と悔い」を抱いた大納言が水と同化してしまう結末部分だけ見ればある種の美しい物語のラストシーンのようにも感じるが、こうした展開のなかにも美しさとは対照的なグロテスクさがテクストのなかに描き込まれる。瀕死となった大納言はそれでも「ただ、あの笛をあの一とに返さぬうちは、この悲しみの尽きるときがない筈だった」と、天女へ笛を返すことを願うが、その直後には異様な面体を持った「老爺のやう」な童子にからかわれ、「せめて、ひとめ、あなたが、見たい！ 人の一念が通るなら、水に顔をうつして下さい！」という大納言の最後の願いも叶わず、せせらぎには大納言の「真赤な口をひらいた顔」が映り、その血が川に流れるだけである。つまり大納言にとってはまったく救いのない状態が結末部分では描かれているのである。

「紫大納言」は、初出から二年後の単行本収録時に決して小さくない改稿が行われており、両者の違いを三品理絵は「静謐な「諦観」の物語から過剰さに満ちた「悪戦苦闘」の物語」への転回として指摘する²⁾。両者は大まかなストーリーはほとんど違いがなく、天女を地上に押しとどめ、笛を盗人に差し出したあげく天女と契りを結ぶ大納言の身勝手な欲望は初出版においても描かれているが、三品の言うように改稿によって大納言の欲望がかなり「過剰」になっているのは確かである。こうした過剰さの増加が小説「紫大納言」の持つグロテスクさをより際立たせており、ここに本作品の要所の一つがあるのは明らかだろう。

そして、そもそも「紫大納言」の冒頭部分にも美しい物語から逸脱する要素が描き込まれている。本作品の冒頭はすでに本稿第一節に引用したが、高貴なイメージを喚起させる「紫の大納言」という呼称を裏切るように最初に「贅

肉がたまたま人の姿をかりた」と大納言の風貌が描写がされ、さらに五〇歳を過ぎてもなお衰えないその好色性が強調されている。

冒頭の段落ではこのようにおよそ優美さに欠ける大納言の姿が語られるのだが、もう一つ、この後の第二段落でや唐突に「袴垂れの保輔」について語られているのがとても興味深い。テクストがここで語る「袴垂れの保輔」は、「左京大夫致忠の四男」の「藤原の保輔」であり、「甥にあたる右兵衛尉斉明」とともに盗賊の首領となつて都を荒らす人物としてその残虐性が記される。結局、「袴垂れの保輔」はテクスト中に直接的に登場することはないが、冒頭の大納言に続いて描写される彼の印象は強く、関井光男は「ここでは紫大納言と袴垂保輔は対比されていると同時に、救いのない内部の曠野を生き延びる存在として描かれている。その意味では、ふたりは互いに呼応し合う人間として等価にとらえられている」と指摘する⁽²⁰⁾。

タイトルや舞台設定から優美・優雅な物語を想像させる「紫大納言」は、冒頭の大納言の描写や、それに続いて大納言に屹立する存在として描出される保輔の姿は、その予想を裏切るに十分であろう。しかもその残虐な保輔は、大納言と同じくもともと貴族階級の人間であり、優美な出自と残虐な本性という二極性を持った象徴的な人物ともいえる。

さて、大納言の愛の物語でもある「紫大納言」は、このように残虐性を含めたグロテスクな要素を随所にちりばめている。これらが前節で検討した当時の文壇において求められた〈健康な愛〉のモードのなかで異質であることは間違いない。では最後に本作品が持つ異質性を別の同時代のトピックのなかで考えてみたい。

四

「紫大納言」が古典の世界を舞台としていることは言うまでもないが、⁽²¹⁾本作品の発表当時、日本の古典文学が活況

を呈するという状況があった。たとえば雑誌『日本浪漫派』とも関係が深い蓮田善明が中心となり、「古典精神」の復興を目的にした雑誌『文芸文化』が一九三八年七月に創刊されるなど、日本古典文学への注目の兆候を見ることが出来る。そして、それを最もよく表すのが「紫大納言」発表の直前、一九三九年一月の谷崎潤一郎による『潤一郎訳源氏物語』（中央公論社）刊行である。前年の与謝野晶子『新訳源氏物語』（一九三八・一〇）〜一九三九・四、金尾文淵堂）の刊行もあり、「源氏物語」への注目は高まっていたと言えるが、中央公論社が力を入れたこの出版は多大な売れ行きを見せ、日本古典文学ブームを印象付ける。文芸雑誌『新潮』では一九三九年七月号の新潮評論において「古典の復活に意義あらしめよ」を掲載し、また同年一二月号の座談会「昭和十四年—文学界の諸問題」で、「古典復興について」の項目があることから古典文学熱の一端をうかがい知ることができる。²⁵⁾

それではこのときの古典復興の中心を担った谷崎源氏の置かれていた位置を大まかに確認しておきたい。『中央公論』一九三九年一月号は谷崎源氏について販売促進の意味もあり制作者側が直接文章を寄せている。中央公論社の社長である嶋中雄作は「源氏物語が日本最初のそして最大の文学であり、日本文化の最も誇らしき金字塔」と述べ、校閲を担当した国語学者の山田孝雄も「源氏物語」の筋は「情事の葛藤に過ぎぬ」と述べた上で、「源氏物語は希有の大作であると同時に傑作」と記し、「わが国民の人情の如何にこまやかであるか、又その趣味の如何に温雅優麗であるかを示すものでもあつて、まさに世界に対して誇るべきものである」と称揚する。²⁶⁾そして『中央公論』の同号において谷崎自身は次のように述べる。

顧れば、足かけ四年前に私が筆を執り始めた頃とは、社会の状況が著しく変り、今や我が国は上下協力して東亜再建の事業に邁進しつゝある。かう云ふ時代に、われ／＼が敢て世界に誇るに足ると信ずるところの、われわれの偉大なる古典文学の結晶を改めて現代に紹介することになつたのも、何かの機縁であるかも知れない。²⁷⁾

もちろんここでも「源氏物語」を「偉大なる古典文学の結晶」と称えているが、「上下協力して東亜再建の事業に邁進しつゝある」日本の状況も谷崎はあわせて記している。三者が「源氏物語」を日本古典文学の傑作と言ひ募るの

は、言うまでもなく『潤一郎訳源氏物語』宣伝のためでもあるが、「東亜再建の事業」という戦争状態のなかで、時代にそぐわない遊蕩文学としての非難もあった「源氏物語」⁽²⁹⁾について高い「日本文化」的価値を付与するためでもあった。

先に言及した『文芸文化』の「創刊の辞」は、世間で声高に叫ばれる「日本精神」の空虚さを訴え、その内実を埋めるための「古典精神」の復興を扇情的に述べている。⁽²⁹⁾ここからわかるように、古典文学への注目は戦時下日本におけるナショナリズムの高揚と密接に結びついている。しかし、このとき古典復興ブームの中心にあった「源氏物語」は戦時下にそぐわない内容を持っているということと非難も呼び込んでおり、その点でやや特異な位相にあった。⁽³⁰⁾

さて、こうした同時代の状況のなかで安吾は「紫大納言」を発表している。遊蕩的なものが忌避された時代に、「紫大納言」は好色な男を主人公に配し、男が天女への愛を抱くも拒絶され悲惨な最期を招く物語内容は、第二節で確認した同時代文壇に求められた〈健康な愛〉とも背馳している。そして二年後の改稿によつて残酷性や暴力性を含むグロテスクさが強調されるに際して、古典的な優美／優雅な世界や健康性とは決定的に離れた作品となっている。優雅な日本文化として喧伝される古典文学を設定のうえでベースとしている「紫大納言」は愛情を核とした叙情性を持ちつつも、このようにそこから逸脱するグロテスクな要素も明らかに組み込んでいる。そしてそれは「紫大納言」と同雑誌の同号に掲載された太宰治の「富嶽百景」がストレートな愛の物語から逸脱している点を考えたとき、まったく異なる物語内容である両者は興味深い響き合いを持っている。戦後に無頼派として一括りにされる安吾と太宰のこれらの作品は、〈健康な愛の物語〉が求められる戦時下という状況のなかで異質さを持っており、そこに同時代に対する批判的強度を見出すことができるのである。

「紫大納言」が収録された『炉辺夜話集』の「後記」には、「直接人性と連絡しない架空の物語を書きはじめます。それは、気楽で、私をたしかにホッとさせます」と記されていた。これは安吾自身の創作時の個人的な心境を語ったものだが、古典を代表として常に国家的イデオロギーとの関連で語られてしまう戦時下の文学とは異なる地点での文

学活動を同時に表してもいる。本稿では「紫大納言」を同時代言説のなかで分析する試みを行ったが、坂口安吾という作家のスタンスが持つ批評性はこうした作業のもとにさらに具体化される必要があるだろう。

注

- (1) 「紫大納言」以外の収録作品の初出は以下の通り。「閑山」〔文体〕一九三八・一二、「勉強記」〔文体〕一九三九・五、「イノチガケ」〔文学界〕一九四〇・七／九、「盗まれた手紙の話」〔文化評論〕一九四〇・六。
- (2) 「吹雪物語」再版に際して「吹雪物語」一九四七・七、新体社。
- (3) たとえば花田俊典「吹雪物語」序説——知性敗北の論理」〔文学研究〕一九八〇・三↓花田俊典『坂口安吾生成——笑劇・悲願・脱構築』二〇〇五・六、白地社）は、これらの作品に関わる安吾の挫折と再生を次のように論じている。
このあと「閑山」〔文体〕昭13・12）や「紫大納言」〔文体〕昭14・2）へとつづく坂口安吾文学の〈新生〉のすばやさとも考えあわせれば、坂口安吾は「吹雪物語」を脱稿したとき、すでにそれなりの自負をもって挫折からの立ち直りを自覚していたように思われる。
- (4) かつて竹内清己「文学のふるさと」（森安理文・高野良知編『坂口安吾研究』一九七三・六、南窓社）が、「文学のふるさと」の世界を、最も美しく抒情化した作品は「紫大納言」でなろうか」と端的に指摘しており、近年においても、加瀬健治「絶対の孤独」と説話体——坂口安吾「紫大納言」論——〔武蔵大学人文学会雑誌〕一九九五・四）も「紫大納言」と「文学のふるさと」の関係を強調し、「坂口安吾事典（作品編）（二〇〇一・九）の「紫大納言」の項にも「むごたらしいこと、救いがないということ、それだけが、唯一の救いなのであります。」〔文学のふるさと〕「現代文学」昭16・8）と説く、安吾独自の思想に貫かれている」（関根和行）と記される。
- (5) 菅本康之「歴史とアレゴリー——「紫大納言」の政治的読解」〔越境する安吾〕二〇〇二・九、ゆまに書房）は、「紫大納言」は、これまで安吾研究においてそれほど多く言及されているわけではないが、その数少ない、貴重であるはずの仕事のほとんどが安吾の〈個人的次元〉におけるレベルでの読解にとどまってしまっている」と述べ、〈個人的次元〉ではなく〈歴史の次元〉での読解の提言を行い、作品発表当時の日本が中国大陸へ侵攻している事態のアレゴリーとして「紫大納言」を再解

釈している。

- (6) 詳細は拙稿「再生の季節——太宰治「富嶽百景」における表現主体の再生」『日本近代文学』二〇一一・五) 参照。
- (7) 亀井勝一郎「解説」(石川達三「結婚の生懸」一九五〇・一一、新潮文庫)。
- (8) 坂口安吾「長篇小説時評(二) 結婚の生懸」『北海タイムス』一九三九・三・二一夕。
- (9) 武田麟太郎「知識層の変貌——大乗的なプログラム」『改造』一九三八・七。
- (10) 片岡良一の文章「現代文学の貧困とその由来」『中央公論』一九三八・一〇。
- (11) 窪川鶴次郎「文芸時評(3) 徳永の佳篇」『中外商業新報』一九三八・一〇・二二)。
- (12) 川端康成「文芸時評(4) 転向作家の歩み」『東京朝日新聞』一九三八・一〇・三三)。
- (13) 古谷綱武「愛情派の作品 十月号の文芸時評(三)」『信濃毎日新聞』一九三八・一〇・一)。
- (14) 森山啓「文芸時評」『新潮』一九三七・七)。
- (15) 森山啓「文学上の「健康性」——文芸時評」『文学界』一九三八・一一)。
- (16) 『結婚の生懸』の「自序」では、「私はいま、正しい良心と誤りない反省とを以てこの記録を書かうと思ふ。自分を美化することなく、欠陥を掩ひかくすことなしに、或る大切な生涯の一時期を最も正確に記録しておきたいと思ふ」と「記録」性が強調されている。実は「記録」性は同時期の戦争小説で大ベストセラーの火野葦平「麦と兵隊」『改造』一九三八・八) にもかわる問題であり、また『結婚の生懸』では、主人公が従軍する際に家族への愛情もせりあがってくる場面があり、この作品における戦争の影響は大きい。
- (17) 森山啓「長篇小説時評4 産業小説の将来」(『都新聞』一九三八・九・二二)。
- (18) 樽尾好「文芸時評」『槐』一九三八・一二)。
- (19) 奥野健男「吹雪物語」と放浪時代——戦争期(奥野健男『坂口安吾』一九七二・九、文藝春秋) 一三六頁。
- (20) 嶋田彩司「安吾追走——「紫大納言」まで」(『明治学院論叢 総合科学研究所』一九九九・一)。
- (21) 三品理絵「紫大納言——悪戦苦闘としての文学」(『解釈と鑑賞』二〇〇六・一一)。なお、改稿の問題を扱った代表的な論に浅子逸男「紫大納言」論(『坂口安吾私論』一九八五・五、有精堂)がある。
- (22) 関井光男「坂口安吾『紫大納言』——あるいは古典文学の転義」(『解釈と鑑賞』一九九二・一〇)。なお、関井はここで本

作品のプレテクストとして『近江県物語』（帝国文庫『珍本全集』前篇、一九二八・一二、博文館）の存在を挙げている。

(23) 浅子逸男「紫大納言」論（前出）や和田博文「坂口安吾・紫大納言」と説話文学」（『鈴木弘道教授退任記念・国文学論集』一九八五・三、和泉書院）は、「紫大納言」と「宇治拾遺物語」や「今昔物語」の関連を指摘している。

(24) なお、新潮評論「歴史文学について」（『新潮』一九三九・六）は、谷崎源氏について触れており、そこで谷崎源氏が「現在、非常な人気をえてゐる」と記されている。

(25) 嶋中雄作「源氏物語の刊行に方つて」（『中央公論』一九三九・二）。

(26) 山田孝雄「谷崎氏と源氏物語——校閲者のことば」（『中央公論』一九三九・二）。

(27) 谷崎潤一郎「源氏物語序」（『中央公論』一九三九・一）。

(28) たとえば藤田徳太郎「源氏物語の価値」（『文芸文化』一九三八・八）は、「源氏君は単な遊蕩児ではない」と、「源氏物語」が「頽廢文学」ではないことを主張している。こうした背後に同時代の「源氏物語」非難が読み取れる。

(29) 池田勉「創刊の辞」（『文芸文化』一九三八・七）。

(30) 谷崎源氏を含めた近代のなかでの「源氏物語」再検討については千葉俊二編『近代文学における源氏物語』（『講座源氏物語研究』第六卷、二〇〇七・八、おうふう）所収の諸論考などが近年の成果として挙げられる。

* 坂口安吾の引用文は筑摩書房版『坂口安吾全集』（一九九八～二〇〇〇年）に拠った。引用箇所すべての旧漢字は新漢字に改め、ルビは省略した。また引用文中の傍線は引用者自身による。

付記 本稿は坂口安吾研究会（第23回研究集会、二〇一一年九月二四日、於・早稲田大学戸山キャンパス）での口頭発表に基づく

ものである。その際、ご教示・ご質問くださった方々にお礼申し上げます。

The Range of Grotesque Love: A Study of Sakaguchi Ango's "Murasaki Dainagon"

WAKAMATSU Shinya

This paper discusses about Sakaguchi Ango's "Murasaki Dainagon" announced in February 1939 under the wartime.

The stage of this novel is the world of classical Japanese literature, and it is a tale in which a hero, who is a playboy, finds a true love for the first time.

The time when the "Murasaki Dainagon" was announced is the time that a healthy romance and classical Japanese literatures were desired. However, the "Murasaki Dainagon" describes the love not only with the purity but also with the grotesqueness. Therefore, you can see the criticism to the health and grace desired for the novels of the same period.